

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

自然科学的人間観に着目したクリニカルサイコロジストの実践性と科学性の関連

著者	小田 友理恵
著者別名	ODA Yurie
その他のタイトル	The relationship between practicality and scientificity of clinical psychologists focusing on natural scientific view of human-being
ページ	1-3
発行年	2020-03-24
学位授与番号	32675甲第493号
学位授与年月日	2020-03-24
学位名	博士(学術)
学位授与機関	法政大学 (Hosei University)
URL	http://doi.org/10.15002/00023033

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	小田 友理恵
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 738 号
学位授与の日付	2020 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 末武 康弘 副査 教授 長山 恵一 副査 ルーテル学院大学 教授 谷井 淳一

自然科学的人間観に着目した
クリニカルサイコロジストの実践性と科学性の関連

〔1〕本論文の受理および審査の経過

小田友理恵氏は、本大学院人間社会研究科博士後期課程人間福祉専攻に 2017 年 4 月に入学後、指導教授・末武康弘、副指導教授・服部環（2017~2018 年度）、長山恵一（2019 年度）より研究指導及び博士論文作成指導を受けてきた。小田氏は博士論文提出に必要な単位を取得しており、人間社会研究科が開催する博士論文研究発表会において構想発表と中間発表（計 3 回）を行い、また法政大学大学院紀要および学術誌に論文を発表する等、博士論文提出の条件を満たしている。

2019 年 9 月 30 日に小田氏から博士論文審査願及び学位請求論文が提出されたことを受けて、同年 10 月 2 日の人間社会研究科教授会において論文受理審査委員会（委員：布川日佐史、長山恵一、関谷秀子、末武康弘）が設置され、同年 10 月 16 日に委員会が開かれた。いくつかの要望が出されたが、論文の構成及び内容は審査に値すると評価され、同年 10 月 23 日人間社会研究科教授会において、論文審査の受理が承認されるとともに、主査・末武康弘、副査・長山恵一、副査・谷井淳一（ルーテル学院大学総合人間学部・大学院総合人間学研究科教授）の 3 名による論文審査小委員会が設置された。各委員が論文の査読を行った上で、2020 年 1 月 9 日に口頭試問と審査を実施し、3 名の審査委員全員が博士論文として合格に値すると判定した。

〔2〕論文の主題と構成

本論文は、専門性が「科学者かつ実践者（scientist-practitioner）」であると言われるクリニカルサイコロジストについて、その実践性と科学性の関連に焦点をあてた文献の展望、理論的研究、量的および質的な実証的研究の結果を示すことによって、わが国におけるク

リニカルサイコロジストの教育訓練のあり方に関する議論に資する知見を提供することを目的として執筆されたものである。

論文の構成は以下のとおりである。

序 章 本研究の目的と構成

第1章 クリニカルサイコロジストの教育訓練プログラムモデルに関する展望

第1節 はじめに

第2節 近代心理学・臨床心理学の始まりにおける科学と実践の関係

第3節 実践の広まりから求められた共通の教育訓練プログラム（臨床心理学の始まり～第二次世界大戦前）

第4節 急増する社会的ニーズによる基礎と応用の融合・シャコウレポートへの結実（第二次世界大戦中）

第5節 教育訓練プログラムの明文化——S・Pモデルの登場（第二次大戦後～ボウルダー会議）

第6節 S・Pモデルへの批判とその後の議論（ボウルダー会議以降）

第7節 アメリカの教育訓練プログラムに関する歴史と議論を展望することによって導き出される諸論点

第8節 本研究の意義と限界

第2章 科学史と心理学史をふまえた心理学の科学性および主観性と客観性の次元的理解

第1節 はじめに

第2節 科学の定義

第3節 科学の分類（自然科学ともうひとつの科学）

第4節 人間科学の方法論

第5節 自然科学の方法論

第6節 心理学における態度・視点・認識論上の対立軸と「主観的」/「客観的」の多義性

第7節 主客の意味とその変遷

第8節 心理学史上の主客の対立

第9節 心理学における主客の次元的理解

第10節 おわりに

第3章 心理学観の測定——TOS-JおよびIOS-Jの作成——

第1節 問題と目的

第2節 方法

第3節 結果

第4節 考察

第4章 自然科学的人間観を測定する試み——還元主義尺度と自然科学的アプローチ

尺度の作成——

第1節 問題と目的

第2節 暫定版自然科学的人間観尺度の作成

第3節 予備調査1

第4節 予備調査2

第5章 自然科学的人間観に影響を与えるディスコースの存在——文系群と理系群および男性群と女性群の比較を通して——

第1節 問題と目的

第2節 方法

第3節 結果

第4節 考察

第6章 クリニカルサイコロジストの「ものの見方」——オリエンテーションとの関係に着目した実践性と科学性に関するインタビュー調査——

第1節 問題と目的

第2節 方法

第3節 結果と考察

第7章 クリニカルサイコロジストの人間観——自然科学的人間観尺度を用いた質問紙調査——

第1節 問題と目的

第2節 方法

第3節 結果

第4節 考察

第8章 総合考察

第1節 本研究の結果の概観

第2節 本研究の意義と今後の課題

〔3〕論文の概要

序論では、研究の目的が述べられ、本論文の内容と構成が概説されている。

第1章では、アメリカにおいてクリニカルサイコロジストの教育訓練プログラムが整備されていった歴史およびそのプログラムに関する議論の歴史が、詳細な文献のレビューによって考察されている。近代心理学・臨床心理学の始まりの時点においてすでにアカデミックな科学と現場での実践との間に対立があったことが、臨床心理学の祖とされるウィトマーらの活動や議論などから確認され、その後公的な教育訓練プログラムの制定が求められるようになる中で、学術団体の分裂と再統合という紆余曲折の歴史を経て、シャコウの多大な貢献によって1949年にボウルダー会議で科学者－実践家モデル（S-Pモデル）の採択へ至る歴史的推移が明らかにされている。またその後、アメリカではS-Pモデルを巡る

議論が続けられ、いくつかの代替モデルが提案されるようになる動向についても論じられている。こうした考察から、わが国の教育訓練モデルを考えるうえで必要となる次の 3 つの論点が導き出されている。1. S-P モデルの社会的・歴史的・政治的な背景を認識する必要性、2. 科学性と実践性のそれぞれの力点に移り変わっていった方向性の日米の違い、3. 科学の定義、研究の「生産」か「消費」かの問題、実践性と科学性の両立の達成の仕方といった S-P モデルの解釈、である。

第 2 章では、心理学における科学性とは何かという問題について、入念な理論的な検討が試みられている。この章の主要な論点は以下のとおりである。1. 科学は歴史的に自然科学と人間科学の大きく 2 つに分類されてきたが、その方法として「説明」と「理解」が挙げられ、自然科学と人間科学のいずれにおいてもその 2 つの方法が必要であることが確認された。2. 心理学や近接の学問の歴史において、主客（主観性と客観性）の問題は、説明と理解、量と質、科学 対 人間性中心といった、さまざまな対立とともに分かちがたく語られてきており、特に臨床心理学の今後のあり方について考えるとき、議論されるべき余地があることが明らかにされた。こうした理論的検討に基づき、この章の結論として、主客の多義性に関する次元的な理解の必要性が提案された。

第 3 章では、個人の心理学観を測定するために、理論的志向性調査（Coan, 1979）の日本語版（TOS-J）および直観的 - 客観的尺度（Shaffer, 1953）の日本語版（IOS-J）が作成され、それらを用いた研究志向の心理学者と臨床志向の心理学者のデータ（計 203 名）が分析されている。その主な結果は次のとおりである。1. TOS-J と IOS-J の相関関係においては、概ね予測どおりに科学的志向性と科学的知見を重視する傾向の間に有意な正の相関がみられた。この結果から、TOS-J と IOS-J の構成概念妥当性が支持された。2. 研究志向の心理学者は臨床志向の心理学者よりも量的アプローチ、物理的記述、科学的知見を重視していることが示唆された。

第 4 章では、自然科学的な人間や心の見方について妥当で包括的な定義を行い、その定義に従って心理尺度（自然科学的人間観尺度）を作成することを目的とした研究が遂行されている。その主な内容と手続きは次のとおりである。1. 文献から得られた理論をベースとして、哲学や社会調査法などの専門家の協力を得ながら、存在論にあたる還元主義尺度と、認識論にあたる自然科学的アプローチ尺度（NSA 尺度）が作成された。前者は「要素主義」「決定論的機械論」「物理主義」「行動主義」「認知神経科学的人間観」の 5 因子、後者は「一般性」「測定」「非人格化」「脱文脈化」の 4 因子から構成された。2. それぞれの尺度の項目を検討するために予備調査が実施された。予備調査 1 では回答者にとってのわかりやすさや実際の意味の受け取られ方が検討され、予備調査 2 では、確認的因子分析によって因子的妥当性が、他の尺度との相関分析によって併存的妥当性と弁別的妥当性が検証された。なお、因子負荷が低い項目の内容が再検討され、最終的な項目が決定された。

第 5 章では、前章で作成された自然科学的人間観尺度を用いて、現代の高等教育における自然科学教育が個人の人間や心への見方に与える影響を検証することを目的とした調査

研究が実施され、その結果について、個人の中に形成されたディスコースの観点から考察が加えられている。調査対象者は大学生と社会人の計 526 名だった。おもな結果は次のとおりである。1. 自然科学教育を集中的に受けた理系の人たちは、文系の人たちよりも自然科学的に人間を理解する傾向が強い、という仮説は概ね支持された。2. しかし、男性群と女性群の差のほうがより重要な要因であり、男性のほうが女性よりも自然科学的人間観を強くもっていることが示唆された。以上の結果から、自然科学的な人間観にまつわるディスコースのジェンダー差の影響は、高等教育の影響よりも大きいのではないかという一つの新たな仮説的な知見が得られた。

第 6 章では、臨床心理サイコロジストの実践性と科学性について、その両者を架橋するものとしての臨床的なオリエンテーションに着目しつつ、インタビュー調査が実施され、その結果と考察が論じられている。調査では臨床心理士 8 名を対象として半構造化面接が行われ、その語りが事例コード・マトリックス（佐藤、2008）によって分析された。その結果、次のような仮説的な知見が見出された。1. 実践性と科学性の両立について倫理的・教育的意味が見出されること。2. 臨床と研究の間に距離が認識されている場合があり、その両立は研究への嗜好性や現実的な制約に影響を受けていること。3. 実践性と科学性の両方が、その人の「ものの見方」を媒介として有機的につながっていること。

第 7 章では、自然科学的人間観尺度を用いた調査によって、日本の臨床心理サイコロジストが実践や研究の中で「科学」に対してどのような姿勢を持っているのかが検証された。臨床心理サイコロジスト（心理臨床家）にアンケート調査への協力が求められ、最終的な有効回答者数は 163 名だった。臨床心理サイコロジストの「科学」への姿勢という点から結果を総括すると、次の 3 点が示唆された。1. 臨床心理サイコロジストは、「個人として」の人間観と問われたときには、極端な自然科学的人間観を否定するような回答を示す。しかし、「臨床家として」もしくは「研究をする際」の人間観を尋ねられた場合には、極端な形の自然科学的人間観に対しての同意の水準を、「個人として」の人間観と比較して高く呈示する傾向が確認された。ただし、そのリッカート式の各質問項目の得点を単純に比較すると、第 5 章で得られた一般の人の結果と比べて高くはない水準であった。2. 「科学」への姿勢のタイプとしては、「実証的エビデンス志向型（実証的エビデンスを重視するタイプ）」「融合的統合型（広義の科学を志向するタイプ）」「生態学的研究志向型（生態学的な科学を志向するタイプ）」「臨床志向型（科学的知見を比較的参考にしないタイプ）」「精神分析志向型（解釈学的な精神分析学を志向するタイプ）」が存在していること。3. 研究を「生産」する経験は、自然科学的人間観にも、心理臨床活動において研究知見を参照して活かそうとする意識にも影響していないこと。こうした結果から、日本の臨床心理サイコロジストには「科学」に対する姿勢において特徴的な傾向があることが示唆され、さらなる検証が必要であることが明らかにされた。

第 8 章では、以上の各章から得られた知見や示唆について総合的な考察が行われ、また本研究の意義と今後の課題が述べられている。

〔4〕論文の総合的評価

本論文は総合的に見て、以下のように評価することができる。

第 1 に、臨床心理サイコロジストの専門性として一般に自明なものと考えられている「科学者かつ実践者 (scientist-practitioner)」という概念が持つ意味について、その歴史的、文化的、政治的、その他のさまざまな背景をおさえつつ、その概念そのものを研究の対象として取り扱うことが必要であり、かつ可能であることを示した点は、本論文のユニークなオリジナリティであると言える。特にわが国では、S-P モデルを臨床心理学における先進国であるアメリカで採用されている一つの理想的なモデルとしてとらえる傾向が強く、そのモデルや「科学者かつ実践者」という概念に対して脱構築的にアプローチしようとする研究はほとんどなかったと言える。そうした中で本論文は臨床心理サイコロジストにとって科学者でもあり実践者でもあるというアイデンティティがどのようにもたらされ、また実際に日本の臨床心理サイコロジストにおいてそれがどのように受けとめられ、実現されているのかを明らかにしようとするわが国では初めての本格的な研究であると言える。

第 2 に、そうした研究目的のために、本論文では詳細な文献のレビュー、理論的研究、尺度作成と調査研究による量的研究、および半構造化インタビューによる質的研究といった、さまざまな研究方法を用いた多角的なアプローチが遂行されている。本論文の中心をなすのは、TOS-J と IOS-J に始まり、自然科学的人間観尺度へと至る心理学的な尺度の作成であり、そしてそれらを用いた臨床心理サイコロジストを主な対象とする調査研究とその統計的な分析であるが、その土台や背景として文献レビューによる歴史的研究、入念な理論的研究、さらにインタビュー調査による質的研究が組み込まれている。このことは、本論文において歴史的、文化的、政治的、哲学的、そしてエスノグラフィックな議論を行うことを可能にしており、本論文の内容や成果を厚みのあるものにしていると言えるだろう。

第 3 に、本論文の中心をなす量的研究、特に自然科学的人間観尺度の作成のプロセスと、それを用いた実証的な調査研究においては、心理学的にみても統計学的にみても、およそ妥当かつ適切な分析の手続きがとられている。今後の追試やその結果による項目の修正等が必要かもしれないが、尺度の視点のユニークさとあわせて、この自然科学的人間観尺度が開発されたことは、本論文の意義の一つとして高く評価できる。

第 4 に、本論文から得られた知見として、想定されていた仮説——研究志向の心理学者と臨床志向の心理学者の違いや、文系群と理系群の違いなど——が確認されただけでなく、それ以外の新たな示唆が得られたことも、本論文の意義として注目できる。それらは、自然科学的人間観における男女差の大きさや、日本の臨床心理サイコロジストが「科学」にどのような姿勢を持っているのかについて、いくつかのタイプに分かれることが示唆されたことなどである。これらは先行研究においてほとんど指摘されたことのない、新しい

研究知見である可能性がある。さらなる検証が待たれるところである。

本論文の課題としては、次のことを指摘しておきたい。

第 1 に、本論文の研究テーマについては日本における先行研究がそれほど多くないため、本論文は主にアメリカなど海外の研究知見や国内の経験的見解を参照することで行われている。そのため、わが国独自の文脈をふまえた検討が不足していると考えられ、日本における今後の議論に資するには十分とは言えない面がある。日本における研究がさらに深まり、進展していくためには、本論文の成果や知見が今後さまざまな形で公開され議論されることが必要であろう。

第 2 に、本論文で作成された TOS-J と IOS-J、そして特に自然科学的人間観尺度については、精度の高い心理学的尺度としてさらなる洗練が求められる。また、これらを用いた調査研究の結果についても、対象者の数や属性などを拡大するなど、継続して実証的に検証する必要がある。さらに、本論文で得られた新たな知見——自然科学的人間観における男女差や、日本の臨床心理サイコロジストが「科学」にどのような姿勢を持っているのかについていくつかのタイプに分かれること等——については、その妥当性をめぐって精密な検証が行われることが重要であろう。

第 3 に、本論文の研究方法論上の特色である多角的アプローチ——尺度の作成とそれを用いた量的な調査研究を中心として、文献のレビューによる歴史的検証、理論的研究、インタビュー調査による質的研究などを組み込んだ——は、ある面で、論証における焦点化が難しく、各論点の知見の有機的なつながりが見えづらくなっている点是否定できない。今後、こうした各論点の知見をより深く検討することで、臨床心理サイコロジストの実践性と科学性の関連に関する独自の理論形成に取り組んでいくことを期待したい。

〔5〕論文審査結果

以上により、論文審査小委員会は、小田友理恵氏提出の論文「自然科学的人間観に着目した臨床心理サイコロジストの実践性と科学性の関連」について、博士（学術）の学位が授与されるのに十分な資格を有するものとの結論に達した。

以 上